

書評・紹介

Robert E. Buswell, Jr. ed. *Chinese Buddhist Apocrypha*

山野 俊 郎

本書は疑經研究の論文十編を取める論文集である。中国において撰述された經典である、いわゆる疑經 (apocrypha) に関する論文九編を掲載し、そしてそれに関連して、インドにおける仏教經典の真正性の問題を扱った論文一編を付録として収録している。序文によれば、本書の出版がカリフォルニア大学バークレー校関係の学者たちの間で具体化したのは一九八二年のことであった。当初の計画では東アジアの疑經だけでなく、チベットのテルマ (gter-ma) 文献 (埋藏されていた聖典) や東南アジアのジャータカの偽典などの研究をも含む、より広範な分野にわたるものであったが、最終的に中国の疑經に焦点を当てた論文集として、ハワイ大学出版部から出版することに決めたのであるという。以下、紙数の許す範囲で十編の論文のそれぞれの内容を紹介してみたいと思う。

なお、本書に使用される「apocrypha」という言葉に対して、評者は一般に「疑經」という用語を用いた。ただし、經典目録を研究対象とする Kyoko Tokuno 氏の論文を紹介する文章の中では、必要に応じて、「疑經」(suspicious scripture) と「偽

經」(spurious scripture) を使い分けた場合もある。

Robert E. Buswell, Jr.; Introduction: Prolegomenon to the Study of Buddhist Apocryphal Scriptures この論文は、本書の編集者でもある R. Buswell 氏による疑經研究への序説であり、本書全体の序論でもある。疑經研究の歴史や意義、問題点、あるいは将来への展望などが広範に論じられている。

著者によれば、仏教学においても、また中国学においても、疑經の研究が正統な学問分野と認められたのはここ数十年のことである。この分野の研究は主に日本の矢吹慶輝氏、望月信亨氏、林屋友次郎氏、及び牧田諦亮氏などのバイオニア的研究者たちによって進められてきたものであり、彼らによって、疑經が中国仏教の伝統において真に中国的な要素を確めるうえで最上の資料であることが明らかにされたという。従来、仏教学は主に比較言語学やテキスト批判にもとづく教義研究から始まったものであり、哲学的関心が濃厚である。一方、中国学の学者は、中国の古典的な文学や哲学の伝統における思想的・歴史的な研究に従事しており、中国仏教の著述家や思想家にはあまり関心を示さなかった。それ故に疑經の研究は、仏教学者においても、また中国学の学者においても長い間無視されてきた分野であったことを著者は指摘し、異った学問分野の間の「異花受精」(cross-fertilization) によって疑經の研究が今後更に発展することを強調している。

著者はまた「apocrypha (外典)」というキリスト教において

長い伝統を持つ言葉を中国撰述の経典(疑經)に適用することの妥当性について論じている。キリスト教における正典(canon)と非正典の關係は、仏教における真經と疑經の關係とは異ったものであるという。著者によれば、apocryphaはギリシア語の apokryha に由来し、本来「隠された」文書、あるいは「秘義の」文書の意味である。現在の用語法によると apocrypha とは、正典ではないが読んで有益な、聖書に準ずる書物のことであり、あるいは、異端の文書とは異なるが靈感(inspiration)が欠如し、それ故に聖書に取められる正典の權威を持たない書物をいい、つまり、聖書に収録される正典以外の諸文書を apocrypha と呼ぶのであるという。キリスト教の聖書はいくつかの正典を集成したものであるが、それに対して、仏教の経典は“open canon”であり、仏教には聖書のような真經の集成は存在しなかった。それ故に、正典(真經)以外の文書(extra-canonical)という意味をもつ apocrypha なる言葉を、仏教の疑經に充たせるのは不適切であると指摘される。あるいは、初期のテキストよりも後に作成された文書(deutero-canonical)を apocrypha と呼ぶこともあるが、このような apocrypha の規準を、正確な成立年代がほとんど不明な仏教経典に適用することは全く不可能であるとされる。一方、虚偽の著者名を冠した文書という意味をもつ Pseudepigrapha (偽典)という言葉が、より仏教の疑經に適當することが指摘される。しかしながら、著者によれば、キリスト教の apocrypha と仏教の疑經とは内容の面においても、また両者が成立するに至った社会的背

景の面においても共通性が見られるのであり、それ故に本書では、仏教の疑經という言葉に対して apocrypha という用語を使用することにしたと説明される。そして著者は、本書で用いる apocrypha (疑經)という用語に対して、インド文化圏の外で成立した仏教文献であり、しかもインドもしくは中央アジアの経典をモデルに作成されたもの、という定義を与える。ここで、疑經が作成された地域をインド文化圏外に限定することに重要な意味があることを著者は注意している。何故なら、厳密な意味では、インド文化圏において作成されたすべての大乘経典はもちろんのこと、多くの声聞乘の経典も「疑經」であると言わざるをえないからであるという。ブッダの時代よりずっと後世に成立したインドの大乗の経典は、中国等で成立した疑經がその著者をブッダに帰したのと同様の理由で、ブッダの教説であることを主張したものである。また声聞乘の経典について言えは、ダルマが各人の方言に従って説かれうることをブッダ自身が容認していたことが知られており、つまり、「ブッダの言葉」が後世に伝えられる際に唯一の正統な伝承は存在しなかったのであって、ブッダの存命中においてもブッダの教えは変形を蒙ったのであり、厳密にはすべての声聞乘の経典が真正の「ブッダの言葉」を伝えるものではないからである、と説明される。

Kyoko Tokuno; The Evaluation of Indigenous Scriptures in Chinese Buddhist Bibliographical Catalogues
この論文では、中国で六朝時代から唐代に至る期間(四一八世

紀)に編纂されたいくつかの經典目錄をとりあげ、經錄作成者における經典の真偽判定の基準(疑經判定の基準)が検討され、また彼らの疑經に対する見解や態度が解明されている。著者がとりあげた經典目錄は、道安の『綜理衆經目錄』(三七四年)、僧祐の『出三藏記集』(五一五年頃)、法綽等の『衆經目錄』(五九四年)、費長房の『歷代三寶紀』(五九七年)、彥琮等の『衆經目錄』(六〇二年)、道宣の『大唐内典錄』(六六四年)、明佺等の『大周刊定衆經目錄』(六九五年)、及び智昇の『開元釈教錄』(七三〇年)の八種である。

著者によれば、經錄家たちにとって疑經とは、インド・中央アジア伝来の經典によって成り立つ中国の經典の伝統を脅かすものであり、彼らは仏教の純粹さを護るために疑經に対抗する責任を感じていた。また、末法思想を信ずる經錄作成者においては、末法の世における疑經の出現は単なる歴史的偶然ではなく、必然的な事実として受けとめられていたのであり、彼ら經錄家にとって、經典の真偽を峻別する作業は護法の行為でもあったことが指摘される。

著者は疑經の判定基準として、經典そのものの内容や形式に関わる内的な基準と、そして、社会的・政治的事情が要件となる外的な基準があったことを明らかにしている。すなわち、まず第一に、中国の經錄作成者にとって真經とは、インドもしくは中央アジアに起源をもち、かつ外国三藏によって訳出された翻訳經典のことであつたとされる。しかし、經典の由来は容易に決定しがたいものであつて、そのような真經判定の基準は有

効に機能しない場合があつた。何故なら、翻訳者の名前が明らかでない多くの經典(「失訳」が存在したからであり、又、經典の後記に記される翻訳者に関するデータも信頼が置けない場合が多かったからである、とされる。思慮深い經錄家は、「偽經」と區別して「疑經」という分類を設けて慎重に対処しようとしたが、結果的に、中国で撰述された多くの經典が真經と見なされ世に流布することになったと指摘される。第二に、經典のスタイルや内容が真偽判定の基準として採用されたという。初期の經錄家の中には、疑經は真經に比べて内容的に劣っており、經典の真偽は容易に區別できると唱える者もあつたが、しかし、彼らの主張する判定基準はいく分不明確であり主観的なものであつたと評される。また唐代の經錄家は、中国固有の宗教的な要素や異端的な教義、あるいは変則的な言辭などを含む經典は疑經と判定できると唱えたという。著者は、道安の『綜理衆經目錄』から智昇の『開元釈教錄』に至る三百年ばかりの經典目錄編集の歴史において、經典の真偽判定の方法にはいく分の進歩は見られると評価しつつも、一方で、中国撰述の疑經經典の中には内容においても、またスタイルにおいても何ら疑經的な特徴が表面に現われず、それ故に真經と判定され世に流布したのも現実には少なくかつたことを注意している。

更に、經典の由来や内容、スタイルに依る判定基準の他に、政治的・社会的状況や仏教教団の要請などの外的条件が、經典の真偽を判断する基準にされたこともあつたことを著者は指摘している。たとえば、僧祐の『出三藏記集』における抄經の取

り扱いや、あるいは、費長房の『歴代三宝紀』の編集方針などがその例であるとされる。また、社会的な混乱や反乱を引き起こす可能性を潜在的に含んでいる經典が疑經と判定されることもあったという。弥勒下生信仰を説く經典や三階教関係の典籍に対する処置がその例であるとされる。また、著者によれば、經錄作成者たちにおいて、經典の真偽判定の基準は一定不変のものではなく変動するものであった。何故なら、經典の内容やスタイルにもとづく判定基準は主観的な性質のものであったからであり、一方、經錄作成者や教団が置かれた政治的・社会的状況は時代とともに推移していくものであるから、それらの外的条件に左右される判定基準も必然的に変化せざるを得なかった、と説明される。また著者は、經典目錄が編纂される時、經錄家たちにおいて、仏教の純粹さを護り仏教の理想を推進するということと、そして、仏教教団の勢力を拡大し、中国において仏教の主義・信条を浸透させるということの、二つの両立したい目標が立てられたことを指摘する。このうち後者の教団的関心が前者を凌ぐ時、前代の独断的な經典の真偽判定が無批判のまま踏襲されたのであり、あるいは、真經の基準そのものが教団の利益のために巧みに変えられたこともあったという。こうして、經典目錄編纂の表向きの目的は、疑經を排除し、中国の仏教經典をオリジナルなインドの經典の伝統に一致させることにあったが、この作業は実際には明快でもなければ容易でもなかったことを著者は明らかにしている。

次に、前記の八種類の經典目錄において、どのような疑經判

定の基準が採用されたかという点について、著者の見解を見よう。

①道安の『綜理衆經目錄』は現存しないが、僧祐の『出三藏記集』巻五には「新集安公疑經錄」が収録されている。ここには、中国において仏經翻譯の始めから道安の時代に至る二百年間に出現した經典のうち、彼が疑經と判定したもの二十六部三十卷が列挙されている。著者によれば、「新集安公疑經錄」に付された序文には經典の真偽を区別する基準は何も語られていない。しかし、インド伝来の正統な翻譯經典と中国撰述の疑經を厳しく区別しようとする試みや、また、經典の純粹性に対してある種の責任感を抱く道安の態度は、後世の經錄家に受け継がれたことが指摘されている。

②僧祐の『出三藏記集』は、ほぼ完全な形で残されている現存最古の經典目錄である。著者によれば、その巻五に収められる「新集疑經偽撰雜錄」の序文には、僧祐が採用した真偽判定の基準として、外面的な根拠及び内的な根拠が示されているという。外面的な根拠とは經典の出処由来に関するものであり、一方、内的な根拠とは經典のスタイルと内容に関するものである。すなわち、教理上、あるいは文辭表現上の洗練を欠くこと、道教などに仏教教団や政府に対する潜在的な脅威を持っていることなどが疑偽經の判定基準として採用されたという。また、同じく巻五に疑偽經として齊末の大学博士江泌の娘尼子が誦出した二十一部の誦出經や、郢州の頭陀道人妙光が撰述した『薩婆若

陀眷属莊嚴經』が挙げられるが、著者はそれらの經典が作成された背景を説明している。更に、真經から抄出されたいわゆる抄經に言及し、僧祐が後世の經錄家に比べて抄經に対して寛大であったことを指摘し、その理由について考察している。

③隋代の法經等に依る『衆經目錄』は、時の政府をスポンサーとして作成された經錄である。この經錄において真偽が疑わしい疑經と、決定的に偽撰と断定された偽經とが明確に区別されたのは、經錄として一つの進歩であったと評される。著者によれば、この經錄の編集者は疑經と判定する主な基準として二つ示している。すなわち、翻訳者の名前や翻訳の日時が一定していないこと、及び經典の内容が疑わしい性質のものであることの二点であるとされる。また、偽經の判定については經典の構造及び内容に関する二種の基準が採用されたという。すなわち、構造的に一經の中に真に仏教的な題材と中国固有の題材とが並存する特徴があり、又、内容的に中国の土着的・民間的な觀念や行為を含んでいるものが偽經と判定されたという。著者はまた、偽經の中に弥勒下生信仰に関する經典が挙げられることに注目し、これらの經典の真偽判定に政府の政治的関心が反映していたことを指摘している。そして、この經錄の編集者が抄經に対して厳格な態度を示し、これを經と区別し「別生」と称したことに著者は注目し、これに関連して抄經作成と教相判釈の関わりについて論じている。

④費長房の『歷代三宝紀』は、疑經を収録するための項目を別に立てなかった点でユニークである。費長房は同時代の經錄で

ある『衆經目錄』に記載された一九七部の疑偽經典のうち、その半分近くのことを無視し、そして『提謂波利經』『薩婆若陀眷属莊嚴經』及び『占察善惡業報經』の三經のみを中国撰述の經典と判定し、残りの八十八經については、これを真經と断定したという。著者によれば、費長房が『歷代三宝紀』において目標としたのは、真經と疑經の間の明確な区別をつけることではなく、疑偽經や抄經、あるいは失訳などの由来の不確かな經典の数を少なくすることであった。それによって、仏教經典の由緒に関する信頼感を高めることを彼は目指したのであるという。このような彼の經錄編集の動機は、当時の時代背景にもとづいて理解されるべきことを著者は指摘している。

⑤彦琮等に依る『衆經目錄』は勅撰の經錄であり、法經等の『衆經目錄』の欠点を訂正し改善するために編集された。この經錄では「疑偽」の項目を立て、ここに二〇九部の疑偽經が収められているという。また、法經等の『衆經目錄』が疑經もしくは偽經と判定した『起信論』『仁王經』『梵網經』などが、この經錄において真經に分類し直されたことを著者は指摘している。

⑥唐の道宣の『大唐内典錄』では、卷十の「疑偽經論」の項に一八三部の經典が記載されている。著者によれば、道宣が採用した疑偽經判定の基準として、民間の習俗や道教的要素を含んでいること、人間の俗悪な感情を描写していること、あるいは、人の精神面の進展よりも世俗の行為への関心が顕著であることなどが示されているという。又、道宣は、疑經が作成された目

的は末法の凡俗の人々を仏教へ導く点にあり、疑偽経は凡俗の人々の低い能力に合わせて説き与えられたものであるとの理解を示しており、そこに道宣の疑偽経観の特徴が見出されるという。

⑦『大周刊定衆経目録』は、周朝の武則天の勅を受けて明佺等が編集したものである。その巻十五の「偽経目録」の項目には二三部の経典が登録されているという。この経録の、政治的問題への関わりを示す顕著な一例として、著者は三階教関係の典籍に対する処置に注目している。この経録は二十二部の三階教関係の典籍を偽経と判定したが、この判定は政府の勅に依るものであり、経録編集者たちの客観的なテキスト批判に基づくものではなかったことを著者は指摘している。

⑧唐の玄宗の治世に編集された智昇の『開元釈教録』では、「疑惑録」と「偽妄乱真録」の項が立てられており、実に四〇六部一〇七四巻の疑偽経が列挙されている。著者はこの経録には疑偽経を判定するための三種の基準が示されていると理解し、それに従って論述が進められている。まず第一に、経典を作成した撰述者の名前が明らかに知られている場合、その経典は疑経と判定されるという。その例として北魏の兵士孫敬徳が撰述した『高王観世音経』が挙げられる。第二の基準は、経典の構造や内容に関するものである。これについて著者は『瑜伽法鏡経』、『要行捨身経』、『仏名経』の三経をとりあげ、その各々に対する智昇のコメントを分析している。そして、疑経の特徴として、他の経典を改換し増減して編集されたものであること、教義内

容が仏教の伝統的な教説に合致しないこと、俗悪な卑しい言葉と聖語とが混用されること、あるいは、仏典に出てくるインドの地名や僧名などに関して正確な知識を欠き、馬鹿げたエラーが見られること、などの諸点に智昇が注目していたことを解明している。そして第三に、経典の教義内容が政治や社会への脅威を含み、社会的混乱を招く原因になると見なされる場合、智昇はこれを疑経と判定したことが指摘される。著者はそのような判定の例として、弥勒下生信仰に関する経典や三階教関係の典籍に対する処置を挙げ、経典の真偽判定において、単に客観的なテキスト上の基準だけでなく、政治的配慮が要因となったことを明らかにしている。

Michel Strickmann: *The Consecration Sūtra: A Buddhist Book of Spells* この論文は、五世紀半ば頃に中国の江南地方で成立したと見られる『大灌頂経』十二巻の分析を通して、この経典の由来を明らかにすると共に、当時の江南地方の宗教事情を検証しようとするものである。近年、中国学の分野で特に明代における諸宗教の融合調和 (syncretism) の研究が熱心に行われているが、著者によれば、既に五世紀の江南地方において諸宗教の融合の傾向が認められるという。

本経は十二部の小経を集成したものである。僧祐は『出三藏記集』において、本経十二巻のうち前九巻がオリジナルのコレクションであり、後の三巻は後世の追加であるとする。そして更に、前十一巻は梵本からの翻訳（ただし失訳）であるが第十二巻の『灌頂経』については、これを秣陵鹿野寺の比丘惠簡が

撰述した疑經であるとして「疑經偽撰雜錄」に収めている。これに對して著者は、『大灌頂經』十二卷を前九卷と後三卷に分類するのは、單に兩者の形式的・内容的な相違にもとづき二分したものであり、又、前十一卷を梵本から訳出された真經であるとするのは、四世紀に作成されたタラニ經典との表面的な類似によつて判断したものにすぎないのであつて、僧祐の本經に對するそのような分類は説得力を欠いたものである、と主張する。

著者によれば、『大灌頂經』は明確なプランにもとづき、統一的な連関をもつて編集されたものであり、十二卷に分れるのは本經の作成者の本来の意図にそつたものであるという。本經卷一には、この經典が仏陀入滅後の末世に、一人の苦行者によつて山中の岩窟の中で再発見されることが記されている。このような記述にもとづき著者は、本經が五世紀の中國に広く行きわたつていた末法のメッセージに共感した若い仏教者たちのグループの一員によつて撰述されたものである、と推測している。本經は誦呪を伴つた厳格な修行を唱導するグループの中で成立したものであり、この經の編著者の関心は、仏教教団の現状の改革と仏法の護持にあつたとされる。また、中國人の宗教生活を理解する上で祖先崇拜の問題は重要であるが、仏教と道教において死者救済のための基本的な儀式が成立したのは四世紀末から五世紀初め頃であり、五世紀半ばに作成された本經は當時の葬法について重要な情報を与えてくれるという。更に、本經には、仏・菩薩やインドの神々の他に中國の土着の五方の神々や龍王、鬼神の名称が記されており、五世紀の江南地方にお

る佛教・道教及び民間信仰の相互の関わりや融合がうかがわれることを著者は指摘している。

Stephen R. Bokenkamp; Stages of Transcendence :
The Bhumi Concept in Taoist Scripture

この論文では道教經典に説かれる道士の階位説をとりあげ、それと佛教の菩薩の行位説との関連が検討される。ここで、五世紀に成立した疑經であり、五十二位の菩薩の行位説を完成した『菩薩瓔珞本業經』が大きな役割を果たす經典として注目されている。著者によれば、道教經典は当初から佛教の菩薩の行位説を採用しており、道教の階位の概念の変化は、中國佛教における菩薩行位説の進展に對応するものであつたとされる。道教經典に説かれる階位説は、また一方で、中國人の願望や信仰に合わせて變形されたという。世俗的な欲求や関心に妥協しつつ展開した道教の階位説には、以下のような傾向が顯著であつたことを著者は指摘している。まず第一に、五世紀初めに成立した道教經典である『靈寶經』は、常に大乘佛教の普遍的な救済論に支持を表明しつつも、この經典に説かれる十転の階位説はむしろ個人的、また身体的な教説であり、個人の死後における身体と魂の変化が強調され、未來の生涯においてより好ましい境遇に再生するための方法が説かれているという。また次に、中國佛教の歴史において最も重要な課題の一つである頓悟・漸悟の教説が道教の階位説にも採用されたことが指摘される。中國で成立した『菩薩瓔珞本業經』は頓悟を説く經典として著名であるが、一方、道教經典として、『靈寶經』では諸段階を経ることなく「速

易」に仙王の位に到ることが説かれ、又、『本相經』においても「一挙」に究極の位に到ることが明されるという。なお、この論文の末尾には、付録として『海空智藏經』において「十転」を説く部分が英訳され添えられている。

Kōatsu Fujita; *The Textual Origins of the Kuan Wu-liang-shou ching: A Canonical Scripture of Pure Land Buddhism*, tr. by Kenneth K. Tanaka この論文は、藤田宏達博士の『原始淨土思想の研究』（岩波書店、一九七〇）の第一章のうち、第四節「淨土思想に言及する関係資料」の第一項「觀無量壽經」(pp. 116-136)に、著者自身による追補と修正を加え英訳されたものである。著者はここで『觀無量壽經』のインド撰述説を否定し、綿密な調査・分析を通して、この經典が中国もしくは中央アジアにおいて撰述されたものであることを明らかにしている。

Whalen Lai; *The Chan-chia ching: Religion and Magic in Medieval China* 『占察善惡業報經』二卷（以下『占察經』）は、六世紀後半に中国で成立したと見られる疑經である。上巻では木輪法によって過去の善惡の業相を占う占察法が説かれ、一方、下巻では大乘の実義として『起信論』とほとんど同様の如来藏説が述べられている。著者はこの論文で、『占察經』の上巻に説かれるマジック的行法 (magic) と、下巻の哲学的教理 (religion) との関連を考察し、この經典の正当な理解に迫ろうとするのである。上巻と下巻の関係について著者は次のような仮説を提起している。すなわち、『占察經』は当初、

現在のような上・下二巻本ではなく、善惡業報の占察や懺悔滅罪を説く上巻だけから成っていたのであり、後に上巻の占察法を教理的に基礎づける教説として、下巻の部分が『起信論』にもとづいて作成され、追加されたのである、と。著者は、この經典の上巻と下巻とが一連のものであり、両者を切り離して理解することはできないことを強調している。研究者によっては本經の上巻の記述に注目し、本經が「現世利益」を説く「庶民經典」であると判断される場合があるが、著者はそのような見方を否定する。すなわち、崇高な智慧（＝本經の下巻に説かれるような）と粗雑なマジック的行法（＝本經の上巻に見られるような）とが、相互に密接な関わりを持っていた中世の宗教的信仰を理解するためには、上記のような見方は不適切であると説明される。『占察經』は六世紀の中国におけるエリートの智慧の宗教 (religion) と民衆的信仰 (magic) という、現代人にはしばしば両立しがたく感ぜられる二つの要素の統合を示す經典であったことを著者は指摘している。

Mark Edward Lewis; *The Suppression of the Three Stages Sect: Apocrypha as a Political Issue* 文字の国である中国では、古来、文学作品と政治は直結するものであり、文学と政治的権力のリンケージは、たとえば、儒教における「經」という語に具体化されているという。仏教においても經典の真正性の問題がそのまま政治的問題ともなったのであり、それ故、中国における疑經の研究は、經典と政治的権威の問題から切り離して考えることはできないことを著者は指摘してい

る。このような観点から、著者はこの論文において、三階教の典籍の分析を通して、政治的権力による三階教禁圧の問題について新たな解釈を試みようとするのである。

三階教の教説は当今を末法と見る終末観を基盤とし、末法の世にあっては旧来の伝統的仏教の教義や実践行が無効であることを宣言して、時代相応の新しい型の仏教を唱導したと説明される。すなわち、国家に支えられた仏教教団において行われていた戒律の遵守や禪定修行の実践、あるいは教理研究などの営みが、三階教の僧俗一体になって行われる乞食や布施などの普仏法の実践に取って代わられるべきだ、と主張されたのであるという。三階教の弾圧は隋の文帝（六〇〇年）、武周王朝の武則天（六九五・六九九年）、及び唐の玄宗（七一三・七二五・七三〇年）の治世下に行われた。従来、弾圧の原因として、三階教が末法の世における世俗権力の有効性と正当性を否定したことが挙げられ、容認されてきたが、著者はこのような見解に反対する。三階教を弾圧した上記の三人の皇帝たちに共通する唯一の要素として、著者は、彼らがすべて国家仏教のパトロンのであり、經典の翻訳や經典目錄の編集作業の後援者であったことを指摘し、教団と国家の緊密な関係に注目する。一方、三階教の教えは、政府をパトロンとする仏教教団と、そしてその教義とを明確に否定するものであったという。三階教徒はそれを仏教の教義の立場から主張し、とくに伝統的な仏教教団を非難しようとしたのであるが、このことが教団の後援者である皇帝たちにとって、彼らの権力への挑戦と受けとられたのであり、

ここに国家による三階教禁圧が発動されることになった、と説明される。著者は隋の文帝、周の武則天及び唐の玄宗の三者によって為された三階教弾圧の事情を分析し、經典の真偽判定が国家にとって大きな政治的問題であったことを解明している。

Antonino Forte; *The Relativity of the Concept of Orthodoxy in Chinese Buddhism: Chi-sheng's Indictment of Shih-li and the Proscription of the Dharmamirror Sutra* この論文では、三階教の根本典籍である『瑜伽法鏡經』に対する評価（真偽判定）が——この經典を真經と判定する場合も、また逆に偽經と判定する場合も——、經典の内容の客観的な分析によって為されたものではなく、むしろ、三階教が置かれていた政治的状況をストレートに反映するものであったことが明らかにされており、中国仏教における真經の概念が相対的なものであること (relativity of the concept of orthodoxy) が印象深く描かれている。

三階教の禁令を出した周の武則天の治世が終わり、李氏の唐王朝が復活するのは七〇五年である。この年から玄宗が即位する七十二年頃までは三階教にとっては好ましい時代だった。三階教の外護者が政府の中枢部に居り、七十二年には『法鏡經』が政府の經典判定の委員会によって真經と判定され、入蔵が決定された。しかるに、著者が指摘しているように、三階教の外護者であり前述の經典判定委員会のメンバーでもあった薛稷が七一年の玄宗毒殺の陰謀に加担してより後、三階教が置かれる政治的状況は一変したようである。同年には勅によって三階教

の無尽蔵院が廃止され、更に七二五年、七三〇年と相次いで禁令が出されている。そして、七三〇年に編集された智昇の『開元釈教録』では、『法鏡經』を『偽妄乱真録』に収めて偽經と断定した。著者は七〇五年以降の、このような政治的状況の変化をふまえて、智昇による『法鏡經』に対するコメントを分析し、この記事の真意を解明している。この記事の中で智昇は、三階僧師利が書いた『法鏡經』の序文（現存せず）を引いているが、そこには本經の翻訳者として菩提流支と宝思惟の名前が挙げられる。智昇はこれを否定し、この經を師利の偽撰とする。一方、敦煌本『法鏡經』の跋文には翻訳者として室利末多の名前が記されている。このような事柄の分析を通して、著者は、『法鏡經』を判定する際に智昇には二つの主な目的があったと指摘している。すなわち、一つには、經典の正統性を体现すべきインド三蔵の菩提流支と宝思惟が邪教たる三階教や、三階僧師利と関わり合っていた事実を抹消し去ることであり、二つには、既存の仏教の正統性を脅かす異端の疑經を作成した師利を厳しく指弾することにあった、とされる。

Paul Groner: *The Fan-wang ching and Monastic Discipline in Japanese Tendai: A Study of Annen's Futsu jibosatsukai koshaku* この論文は、日本天台における『梵網經』の受容と、それにもとづく戒律の展開を、とくに五大院安念（八四一—八八九?）の『普通授菩薩戒広釈』を中心に論じるものである。『梵網經』の経題には鳩摩羅什訳とあるが、この經典は中国において撰述された疑經であり、四

四〇〇—四八〇年頃に成立したと考えられている。

著者によれば、中国においては『梵網經』の大乗戒と『四分律』の小乗戒が併用され、梵網戒は小乗戒を補足するものであった。一方、日本天台においては、『梵網經』に依る天台僧の授戒儀式が定められ、この經典が宗派の第一の基本的な律典となつて以降、梵網戒は中国以来の戒律の伝統を払拭した全く新しい意味づけを得たのであるという。しかし、そのことが同時にまた、後世の日本天台における戒律の衰退を引き起こすことになったと指摘し、著者は、日本天台において梵網戒が教団の規律を正し、出家者の行動を批判していく上で不適切な戒律であった理由を考察している。次に、日本天台では最澄によつて『梵網經』が根本律典に据えられたが、彼の没後、梵網戒を教団生活に具体的にどう適用していくかという問題や、あるいは梵網戒と密教の關係の問題など、困難な問題が未解決のまま残されたという。これらの課題に対して多くの解答を与えたのが安然の『普通授菩薩戒広釈』であるとされる。安然は、密教と梵網戒の關係に真剣にとり組んだ人物であり、彼によつて理念的・抽象的な密教の三摩耶戒が宗教的行儀の基盤に据えられることになる。しかし、その結果、持戒についても、又、犯戒についても大変寛大な解釈が与えられるようになったことを著者は注意している。安然の没後、彼の戒律の解釈は多くの僧たちに受け入れられ、戒律の抽象的な解釈がますます進展して、遂に平安時代の末頃には、天台宗や他の宗派において、授戒儀式は小さな役割しか果さなくなるのであり、それが全く廃される場

合もあつたと指摘されている。

Ronald M. Davidson ; Appendix. An Introduction to
the Standards of Scriptural Authenticity in Indian
Buddhism

この論文では、インドの仏教において經典の真正性の基準がどのように決定されたか、という課題について論究されている。この課題が、初期の僧伽、第一回仏典結集會議、アビダルマ仏教、大乘仏教、及び密教 (Vajrayana) においてそれぞれ検討されている。

著者は、ブッダが自ら多くの異った言語を用いて教えを説いたことや、またブッダの言葉を誦出する際に標準となるべき特定の言語が定められていなかったことなどを指摘し、仏教の歴史の最初期においてブッダの言葉が変形されることになった事情を明らかにしている。また、ダルマはブッダによって見出され、ブッダの教えを通して体现されるものであるが、伝持されたブッダの言葉の真正性に関連して、やがて、教団の長老たちはブッダと、彼によって説かれたダルマの關係について考察するようになったという。ここで、ブッダの直接の弟子たち(声

聞弟子)の教説もダルマであり、ブッダの言葉に等しいものと見なされるようになり、ダルマの概念が拡充されたという。次に、アビダルマ仏教において論師たちは、自派の論蔵がブッダの教説として経蔵や律蔵と同等の資格を得るよう努力したとされる。ここで著者は、アビダルマ諸派のうち有部と上座部の場合をとりあげ論じている。著者によれば、論師たちは、ブッダ自身が教の体系を説き、それが後に王舎城での仏典結集の會議で誦出されたと主張したという。あるいは又、自派の論蔵の発見や伝承にまつわる神話を作成し、それによって目的を達成しようとしたとされる。そして、アビダルマ仏教において、自派の經典の真正性を主張するために採用されたこれらの方法が、後に大乘仏教や密教にも受け継がれたことを著者は指摘している。

(Chinese Buddhist Apocrypha ed. by Robert E.
Buswell, Jr., University of Hawaii Press, Honolulu
1990 ix+342 pages 15.5×23.5cm)